

創価教育と家族・地域・世界

杉山 由紀男

1. はじめに

皆さま、ようこそ創価大学へ、また夏季大学講座においでくださいました。心から御礼申し上げます。これから3時間ほどこの講座にお付き合いいただきますが、どうぞよろしく願い申し上げます。

最近、大学は、アクティブラーニングといいまして、積極的な参加型の授業を展開しています。これは文部科学省推薦です。今日の講座もそのスタイルで行いたいと思います。4人1組でグループを作ってください、何回かディスカッションを行いますので、是非アクティブな意見交換をお願いします。

本日のテーマは「創価教育と家族・地域・世界」です。社会は激しく動いています。その変化の波に家族はいま大きく洗われています。また、地域社会は家族の次に身近な場所ですが、そこでの人と人との絆は弱くなったとよく言われます。本当にそのとおりだと思います。そして世界。グローバル化という言葉をよく耳にするようになりました。人・モノ・カネ・情報が国境を越えて地球規模で動いています。この講座では家族と地域の過去と現在を社会学の目でよく認識し、創価教育の理念をヒントに、家族と地域と世界のより良い関係、より良い未来を皆さんと一緒に探っていきたいと思います。

2. 社会学の視点

まず社会学という学問についてお話しします。よく“〇〇の社会学”などと気軽に使われて、〇〇についての“雑学”のようなイメージがあるかもしれませんが、意外にきっちりとした学問です。どのような学問なのでしょう。これについては社会学者によっていろいろ見解が異なりますが、最大公約数的にいきますと、“人間（個人）と社会の関係を視点の軸にして、あらゆる現象を考察していく学問”ということになると思います。私たち人間一人ひとりが社会をつくる。「社会」とは、言い換えると、「人間関係の世界」あるいは「人間が作り上げる集団」のことですね。家族は最も身近で小さな人間関係の世界すなわち社会であり、地域も社会です。人間関係の絆が弱くなっている昨今、地域は社会といえるのかという疑問もありますが、ひとまず社会

と言えると思います。また学校や会社、あるいは国家もすべて社会ということになります。そして「人類社会」という言葉がありますが、そのような一つの社会が現在あるのかといわれると、あるようなないような微妙な感じがします。ともあれ私たち人間一人ひとりが家族、地域、学校、会社などの社会をつくっています。しかし同時にその社会によって私たちはつくられています。例えば学生として4年間大学に在学しますと、良くも悪くも、また大なり小なりその大学の色に染め上がります。これは大学という社会によって人間がつけられたということですね。民族性、国民性、県民性の違いなどという現象も社会が人間をつくる例ですね。社会学は、こうして一人ひとりが社会をつくり、また社会が一人ひとりをつくっていく、この相互関係からあらゆる現象を捉えていく学問です。

この社会学の代表的な研究者としてフランスのE.デュルケムがいます。この人は創価教育学をつくった牧口常三郎に多大な影響を与えた人です。もう一人影響を与えた人物としてアメリカの教育哲学者J. デューイがいますが、デューイの著作を読みますと、この人は本当に社会学者だなとつくづく思います。このように創価教育学は社会学ととてもご縁が深いのです。このことは牧口自身も語っていますし、牧口の『創価教育学体系』にはデュルケムがたくさん引用されています。そのデュルケムは『自殺論』という本を書きました。自殺という一見まったくバラバラで個人的に見える現象を社会的に研究した名著です。皆さんに質問します。同一年齢でみたときに「未婚者」と「既婚者」ではどちらの自殺率が高いでしょうか。デュルケムが用いた19世紀のヨーロッパの統計によると「未婚者」の自殺率が高いそうです。しかしこれには男女差があって、男性は結婚すると自殺率が大きく下がりますが、女性は少ししか下がらないそうです。では次に「子どもがいる場合」と「子どもがいない場合」です。これはどうでしょうか。これは子どもがいる場合のほうが自殺率が低いそうです。結婚しただけではあまり自殺率が下がらなかった女性は、子どもができると大きく下がるようです。なお全体での自殺者数の男女比はデュルケムの時代のヨーロッパも現代の日本も男性が圧倒的に多いようです。ちなみに日本では1998年くらいからここ20年弱自殺者の数は高止まりしています。ここ数年減少傾向にはありますが、やはり高い率です。そして、大体男性が2強、女性が1ほどの割合で推移しています。さらにデュルケムは宗教による違いについても調べています。ヨーロッパはキリスト教が多いですが、カトリックとプロテスタントではプロテスタントのほうが自殺率が高いようです。

さて、ここに見られるのは、自殺を集合レベルで捉える視点です。未婚者の集合、既婚者の集合、特定の信仰を持つ人々の集合ごとに見て、その自殺率が高いか低いかを問題にしています。いわば個々の自殺の個人的な動機・きっかけと、集合体全体の自殺率を生み出す原因はまったく別のものだという視点です。例えば自殺の原因として、いじめだとか、介護疲れだとか、メディアでいろいろ報じられますが、デュルケムの見方からすれば、それらはなぜその個人が自殺に至ったのか、その直接的で個人的な動機やきっかけであって、集合的な、すなわち社会的な自殺率の高低の原因はまったく別のところにある。そしてその原因は1つではなくて4つあるということです。いま挙げた結婚や宗教による違いの例はそのうちの1つで、デュルケムは「自己本位的自殺」と

名づけています。簡単にいうと、集団の活動にあまり参加していない人、集団とのつながりが弱い人、そこでの社会的な絆である人間関係が弱い人、「自己本位的」というのはそのような意味なのですが、そうした人々が多い集団の自殺率は高いというわけです。個人に即して言い換えますと、強い人間関係に結ばれていない人はいろいろ嫌なことがあって自殺したくなった時に、それにブレーキをかけてくれるものが弱いため、自殺への傾向が強くなる。反対に、結婚や子どもの存在によって強い人間関係に結ばれている人は、自分が死んだら家族や友人はどうなるんだという他者や集団への配慮が生じやすく、これが自殺にブレーキをかけるというわけです。宗教というプロテスタントよりカトリックのほうが教会組織が強固で、そこにおける強い集団的なつながりが自殺にブレーキをかけ、自殺率を下げるという論理です。すなわち、交友関係を強く結んでいる人が身近にいと、その人たちの存在が、そのような社会的環境が、自殺に対するブレーキになる。そういう社会は自殺率が低い、自殺しにくい人をつくるということになります。ここに社会が人間をつくるという社会学の視点があります。集団と人間の、そして人間相互の絆が強い社会は自殺しにくい人間をつくるというわけです。

ちなみに男女の違いについてデュルケムは、男性はより多く社会化されている、女性は相対的に社会化されていないという趣旨のことを述べています。動物が自殺をしないのは本能によるコントロールが効いているからで、人間はそのような本能を大幅に免れているため、社会生活の中で集団や他者に適切につなぎ止められることによって自殺が一定程度抑止される。しかし、社会生活への参加はさまざまな事情でそれが乱されて不正常になり、自殺への抑止効果を弱めることも少なくありません。男性の自殺率が高いのはそこに原因がある。デュルケムの論理を補いますとそういうことです。しかし、男性が仕事や色々なことで参加している社会的な活動に女性はあまり参加できていない、参加させられていない。その分本能による抑止力が強く、また不正常的な社会生活によってかく乱される機会も少ない、だから自殺も少ない。そう彼は言っているように思われます。しかし、私は本当にそうかなと思うのです。たしかにデュルケムの見方からすれば、女性がどんどん社会進出していけば、それに伴って自殺率も男女平等になる可能性があります。女性の率が上がる可能性は大いにあると思います。しかし、この後お話しする地域のこととも関連するのですが、私は女性の自殺率が低いのは、女性のほうが地域をはじめ知人や友人との交友関係の絆が強い、そこにも大きな原因があるように思います。男性には会社などの人間関係がありますが、自殺にブレーキをかけるほどではない。その点女性は友人・知人とたくさんおしゃべりし、ともに過ごす時間が長いように感じます。男性より女性のほうが長生きなのはこれも関連しているのではないかと思うほどです。ともあれ、このように社会環境の違いが、すなわち集団や人との絆が強いかわ弱いかによってそれぞれ自殺しにくい人間、しやすい人間をつくるということになります。社会が人間を作る、これが社会学の一方の観点です。そして、このような人間一人ひとりがまた社会をつくっていく。これが社会学のもう一つの観点です。

3. 激変に洗われる家族

このような社会学の観点から家族と地域を見ていきたいと思います。図1は日本人の国民性調査のデータです。統計数理研究所が5年ごとに調査したものです。1958年から5年ごとのいろいろな調査項目がありますが、その中で「あなたにとって一番大切なもの」の統計を見ていきましょう。まず1958年は「生命・健康・自分」が大切だという人が多いですね。続いて「子ども」が大切、そして「家族」、子どもと家族は重複しますが、以下「金・財産」とか「愛情・精神」とか、「仕事・信用」「国家・社会」と続きます。そして見るとわかりますが、この「家族」という項目が最近に近づくにつれて、どんどん大きくなっています。これはなぜなのでしょう。「子ども」のほうはあまり増えていませんが、「子ども」と「家族」を合わせると圧倒的に家族が一番大切だということがわかります。お金よりも家族が大切、そういう人が多くなっているということです。気がゆるせる自分の居場所としての最後の砦が家族なのでしょう。

ところで、家族とは何でしょうか。あなたの家族のイメージは次のどれでしょうか。古い資料ですけれども旧総理府、現内閣府による国際比較の調査があります（図2）。0歳から15歳までの子どものいる家庭の親1000人ほどに調査をしたもので、1982年の資料です。まず日本は「同一の家系によって結ばれた人々の集まり」が約15%、「血縁で結ばれた人々の集まり」約34%「愛情で結ばれた人々の集まり」43.5%です。これが韓国の場合には「同一の家系で結ばれた人々」が少なく「血縁で結ばれた人々の集まり」が多いです。その後に「愛情で結ばれた人々の集まり」が続きます。一方アメリカ、イギリス、西ドイツ、フランスの欧米では「愛情で結ばれた人々の集まり」と考える人が非常に多いです。これは古い資料ですので、別の平成19年から平成26年

図1 「あなたにとって一番大切なもの」（出典）「日本人の国民性調査」統計数理研究所 HP（2017.7.）

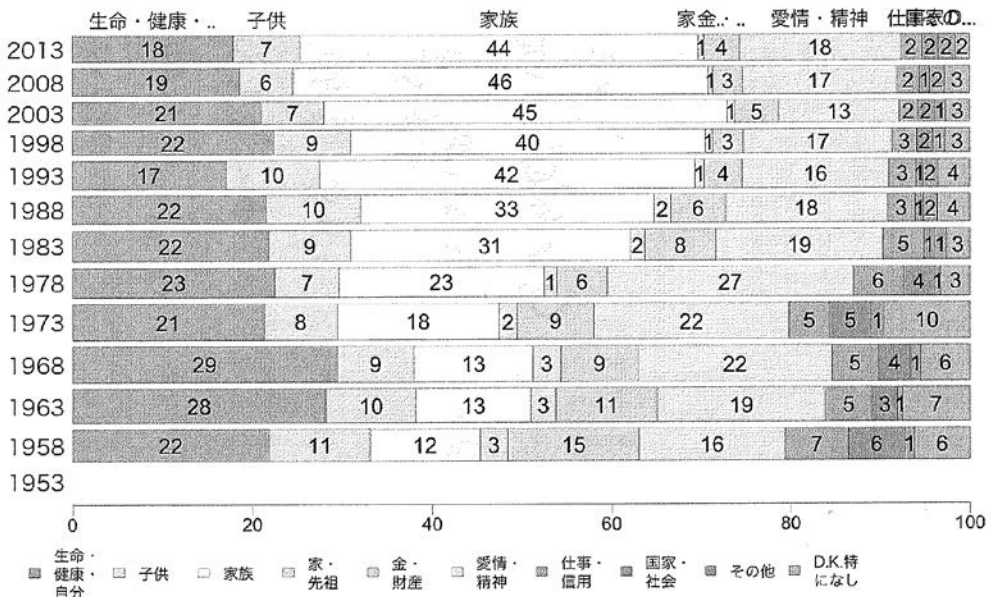
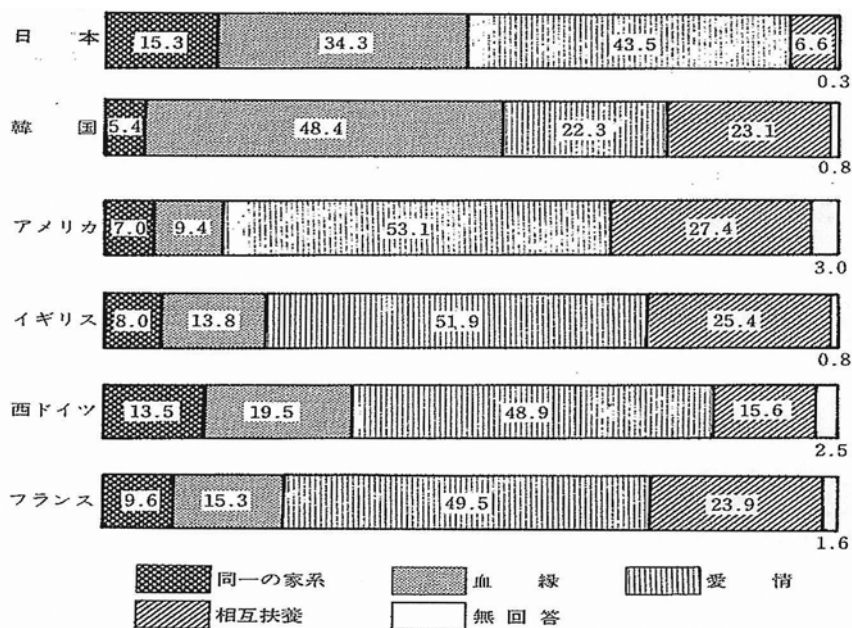


図2 「家族のイメージ」(出典) 総理府青少年対策本部編『青少年と家庭』1982年。

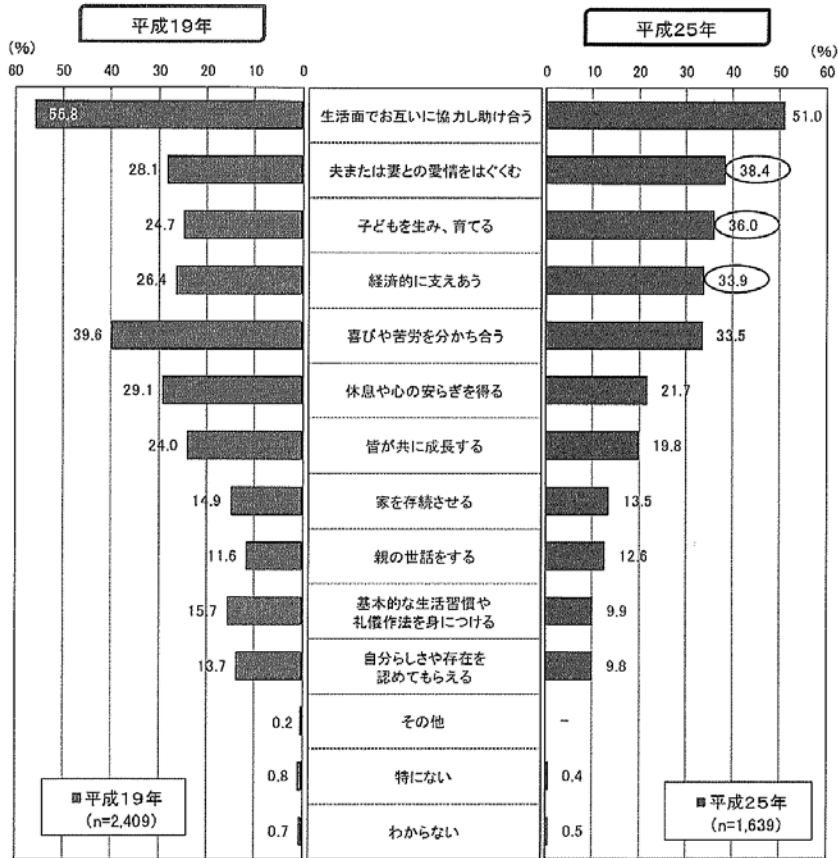


までの内閣府が行った調査をお示しします(図3)。

「家族の役割として重要なことは何ですか」という問いに、答えを複数の項目から3つまで選んでもらう形式で数千人を対象に行われたものです。2つの年を比較すると「生活面でお互いに協力し助け合う」、つまり相互扶助の要素と、「夫または妻との愛情をはぐくむ」、すなわち愛情の要素がありますね。そして愛情の要素が増加しているのがわかります。「子どもを生み、育てる」これは少子化による危機感が影響しているのかもしれませんが、増加しています。「経済的に支え合う」これも長引く不況のせいが増加しています。また「喜びや苦勞を分かち合う」「休息や心の安らぎを得る」「皆が共に成長する」この辺りがお互いに助け合うとか、愛情とかに関係するものだと思います。「家の存続」などは本当に少なくなりました。また「親の世話をする」、これは介護等だと思いますが、こちらも全体からすると多くないですね。

これらの資料から、欧米のように愛情中心の家族観が強くなってきていることが見てとれます。今は愛情がないとなかなか家族生活の継続は難しいということですね。そうやってきました。しかし、昔は結婚に愛情は要りませんでした。私の父母はどちらも大正生まれですけれども、その年代の人たちに尋ねると大体結婚は家と家との間で行われるので親が相手を決めていました。結婚式当日に初めて相手と会ったという例も珍しくなかったようです。愛情は結婚の条件ではなく、結婚後に育むものだったと言えます。今は結婚する前から愛情を育んでいかないと家族生活を続けていくのは難しい時代になりました。その家族が今、小さくなっています。国勢調査の資料によりますと、世帯の人員は、1960年は平均して4.14人。平成2年、7年、12年、17年と、1世帯辺りの平均は2.99人から2.8人へどんどん下がってきて平成22年だと2.42人にまで減少

図3 「家族の役割として重要なこと」(出典) 内閣府政府統括官『家族と地域における子育てに関する意識調査』平成26年。

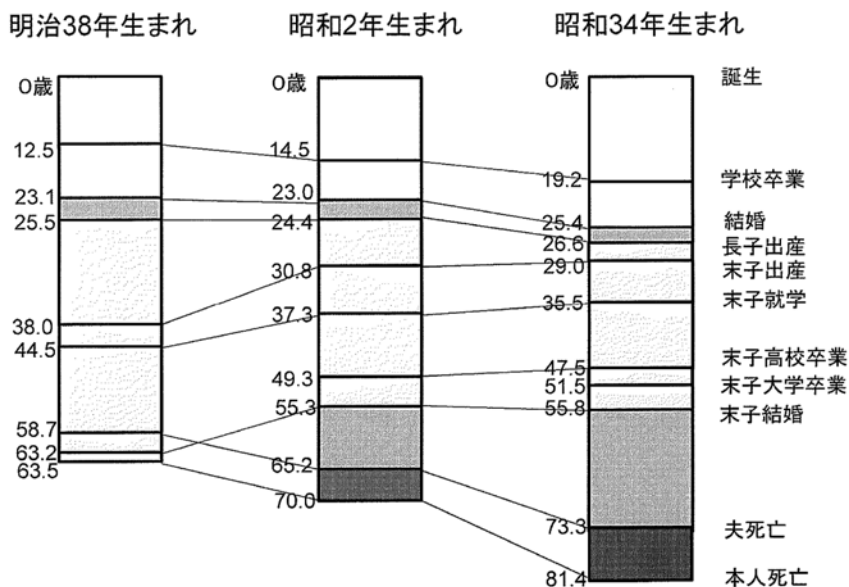


<参考>
 平成19年1月実施調査
 調査名：「少子化対策と家族・地域のきずなに関する意識調査」
 対象：全国18歳以上の男女4,000人
 (注) 今回調査の対象：全国20歳～79歳の男女3,000人

します。さらに世帯の種類別では、平成2年から22年まで「夫婦のみ」「夫婦と子ども」、そして「男親と子ども」「女親と子ども」の核家族世帯と単身世帯が大変多くなっています。

続いて図4は女性のライフサイクルの変化です。これは結婚した女性が明治38年生まれ、昭和2年生まれ、そして昭和34年生まれの場合の平均的なライフサイクルの比較です。右に行くほどグラフが長くなっているのは寿命が延びているからです。まず明治38年生まれの方は、学校卒業時が12.5歳、結婚が23歳くらいで、そこから2年ほどで最初の子どもが生まれます。その後子どもが何人か生まれて最後の子どもが生まれるのが38歳。一番末の子どもが学校に上がるのが44.5歳、そして58.7歳のときに夫が亡くなる。63.2歳で末の子どもが結婚する。平均すると末の子が結婚するときに父親はいません。一方、昭和34年生まれの方、寿命が延びていますが子どもが少ないです。1世帯に1人か、2人です。末の子どもが結婚するとき母親は55.8歳。

図4 「女性のライフサイクル」(出典) 大梶俊夫他『社会学のプロフィール』八千代出版、1995年。資料のオリジナルは労働省婦人局の資料。図を一部補正してある。)



そして夫が死亡するのが73.3歳。子どもは結婚すると出ていきますから、夫婦だけで過ごす期間が約17、8年あります。愛情なくして続くでしょうか。そして夫が先に亡くなって、それから8年ほど一人で暮らすということになります。こういう点からも愛情が鍵だということになりそうです。愛情とは何か、これは大変重要な問題ですが、ここでは残念ながら時間の関係で取り上げられません。ではここで「家族はなぜ小さくなってしまったのか」について皆で考えてみたいと思います。4人1組で自由に話し合ってみてください。(受講生ディスカッション)

いろいろなお答えをいただきました。就職や結婚で子どもが家を出て行く、仕事のある場所や家賃の安いところに。独身者、つまり結婚しない人が増え、少子化で家族員が減った。高齢化などで単身世帯が増えた。これらはすべて正解と言っていいと思います。まず、結婚すると家を出て行く。これは核家族の考え方ですね。特に第二次大戦後、核家族の考え方、理念が定着しました。これは憲法上の「婚姻は両性の合意のみに基いて」という考え方とも関係しますね。昔は、階層にもよりますが、結婚相手は親や親戚が決めていました。たとえば皆さんのお子さんやお孫さんが相手を連れてきて「結婚することになりました」と相手を紹介した時、「勝手に決めるんじゃない。わが家は伝統的に親が、家が決めるんだから」などと言えば、「お父さん、お母さんがやろうとしていることは憲法違反です」と言われてしまうかもしれません(笑)。また、結婚しない人が増えた。これは未婚化・晩婚化ですね。たしかにこれが少子化の大きな要因になっているようです。

では、なぜ核家族の考え方が浸透し、また結婚しない人、あるいは結婚しても子どもをもうけない人が増え、さらに少子化が進行したのでしょうか。これにはさまざまな原因が指摘されて

いますが、その最も基本的な前提は産業化の進行と書いていいと思います。ヨーロッパで産業革命が起こって以来、多くの人が産業の中心だった家業を離れて外の工場や会社で働くようになりました。日本でも明治以降、戦前から戦後にかけてこの産業化がどんどん進みました。産業革命という機械が発明されたことがまず思い浮かぶかもしれませんが、それ以上に私たちの生活スタイルが産業革命の前と後では一変してしまっただけでなく、それが革命と言われる所以です。家業がじわじわ衰退していきました。明治の初めまで日本の総人口のおよそ9割は農業人口だったとも言われています。現在は何%なのでしょう。5%以下だと思います。しかも第2種兼業農家といって、農業以外の仕事を主として、傍らで農業をする、こういう人の割合が多いようです。また職人の伝統的なもの作りや老舗の商いなどの家業も少なくなりました。農業の場合、機械化が進んでいなかった頃は家族総出で協力をする。田植えともなれば村中で協力をする。実はこれが人と人との絆を強固にしていました。その家業が衰退し、大勢で協力しながら働く必要がなくなった。これが大勢で一緒に住む必要がないということですね。そして家業の衰退は家業の後継者を不要にしました。昔は家業を継いでもらうために結婚し、子どもを産みました。子どもができなかったらまず養子を取ってそこにお嫁さんやお婿さんをもらう。とり婿とり嫁などと言われました。しかし家業がなければ家業を継ぐ人がいなくてもいい。これは子どもを産まなくてもいいということにもつながってきます。私はこの大学で働いていますが、子どもに大学の教員を継いでもらわなければ困るという事情はひとつもありません。そんなことはできませんし、やってもいけない。つまりわが家に後継者は要らないのです。でも「あなたが年をとったらどうするんですか。」そのために福祉のさまざまな制度が発展してきました。ともあれ、これが未婚化、そして少子化の基底だといっていいと思います。

次に産業化の結果として、家業による生産的な仕事をはじめとして家族の様々な役割を外部の工場や企業が担うようになって、家族は消費生活中心になりました。生産は会社や工場に、出産は病院にお世話になる。昔は産婆さんが来てくれました。それから養育は保育園や幼稚園、教育は学校、娯楽はレジャー施設で。最近ゲームによって子どもの娯楽が家の中に回帰している面も少しありますね。それから宗教。宗教的な催しの単位としての家族は日常的には存在しなくなってきましたね。せいぜいお盆や正月、お彼岸や法事などに外の葬祭場やお寺、神社などでそれを行う程度です。それから介護。これも伝統的に家族で行ってきましたが、施設や病院で行われるようになりました。公的介護保険制度が2000年から始まりました。家族だけではもう無理だということですね。制度導入の議論が行われていた当時、子どもが親の面倒をみるのは日本文化の美風だとばかりに制度導入を遅らせるような発言をした政治家もいました。しかし、もはや家族だけでは不可能です。家族がやらなくてもいいというのではありません。私の実家でも経験がありますが、家族だけで介護をする大変さを身をもって実感しました。

このように産業化によって伝統的な家族の役割を外部の機関や企業などが担うようになりました。その結果家族で行うことはせいぜい消費。その他の役割は外部の機関が行って、家族の役割はその補助的なものに変わったと書いていいと思います。それ故、それらはどれも大人数です

る必要がありません。さらに言えば、すでにお話ししましたように、そもそも結婚する必要も子どもをもうける必要もありません。では、結婚や家族の意味は何なのだろうと思う人もいらっしゃると思います。それをこの後皆さんでディスカッションしていきます。ともあれ、家族は消費中心になり、生産のための協働が必要なくなりました。その結果必然的に、個人の尊重、すなわち個人主義の考え方が家族の中にもどんどん浸透していきました。こうした背景があって家族は小規模化、そしていろいろな意味で弱体化したと言っていると思います。これ以外にも要因はありますが、基本的なところをまず確認しておきたいと思います。

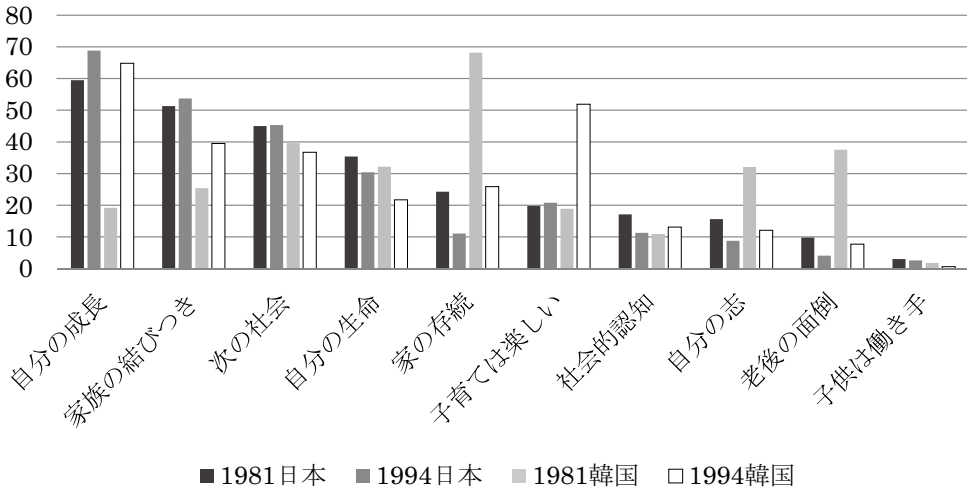
4. 結婚・出産の意味をめぐって

さて、今は結婚する必要のない時代だと先ほど言いました。では、皆さんはなぜ結婚しましたか、あるいはこれからの人は、なぜしますか。これをグループで話し合ってみたいと思います。因みになぜ結婚しないのかについては問いません。結婚する必要はないという前提です。結婚するもしないも自由なのになぜ結婚したのでしょうか。また、なぜ子どもをもうけましたか、あるいはこれからもうけますか。これも話し合ってみてください。(受講生ディスカッション)

それでは、理由を伺います。少し言いにくい面もあるからでしょうか、親や周囲に勧められたから、結婚するのが当たり前だと思っていたから、結婚したかったからなどの答え以外に、はっきりと結婚の理由を述べた方はあまりいらっしゃらなかったようですね。ここにいらっしゃる多くの方が青年期を迎えた頃は、もう産業化が大分進んでいましたので、結婚しなくてもよかったのですが、多くの方が結婚しました。なぜなのでしょう。実は昔はなぜ結婚するかなんて個人が考える必要はありませんでした。皆さんもそうだったと思いますが、人間として生まれてきたら結婚するのは当たり前と思っていたはず。それは先ほど言いましたように、家業を継がなければいけなかったからです。福祉の制度も充実していない時代に家業がなくなれば、原理的には家族全員が餓死しなければなりません。しかし、皆さんはすでに外でお勤めする方が多かったと思いますので、本当は結婚しなくてよかったはず。ただ、時代が変わったからといって、人間の感覚や考え方はそう急には変わりませんね。皆さんが結婚したのは、多くの人が家業を継いでいたその時代の人々の感覚を皆さんも持っていた、残っていたからだとすることができると思います。私は結婚しない方がいいと申し上げているのではもちろんありません。結論を先に言いますと、結婚しなくていい時代に結婚する人は、単に結婚したいからという以外のはっきりとした理由をもった方がいいということをお願いしたいのです。

統計を見てみましょう。資料の文字が小さいため図でお示しできませんが、男女800人弱を対象に「結婚の理由」について内閣府が調査したもので、平成15年版『国民生活白書』に掲載された結果のデータです（内閣府HPより）。男女で差がありますが、「一緒に生活したいと思ったから」「自分の家庭をもちたいと思ったから」「子どもが欲しかった」「子どもが生まれるから」などの個人的な理由が多く挙げられています。「結婚するのは当然と思ったから」「結婚する年齢だと思ったから」「親が安心するから」「結婚しないと世間体が悪い」などの非個人的な理由も挙

図5 「子どもを産んで育てる意味」 総理府青少年対策本部の国際比較調査報告書（1982:1996）のデータより作成



げられていますが、きわめて少数です。「経済的な理由」、これも少数ですが、長引く不況の中で、切実な問題かもしれません。こうした内訳です。もう一つの資料はあてかなり古いものを用意してみました。国際比較の調査です（図5）。これは15歳までの子どもをもつ親各国1000人ほどを対象に旧総理府等の青少年対策本部が行なって、1981年と1994年に行われた調査の報告書のデータから作成したものです。たとえば1981年の韓国では「子どもをなぜ育てるのか」という問いに対して、「次の社会を担う人材を育てる」「家の存続」などの非個人的な理由の割合が多いようです。ところが1994年になると「家の存続」は大きく減少しています。この10年余りの間に韓国で何があったのでしょうか。これはこれで大変興味深い問題です。そして「子どもを産んで育てることで自分が成長できる」「子育ては楽しい」など、個人的な理由が多くなっています。また「老後の面倒をみてもらう」という答えも大きく減って、もともと少なかった「子どもは大事な働き手」はさらに少なくなって、子どもを労働力としてはほとんど期待していないということがわかります。また日本も、そしてここにはデータを示していませんが、アメリカも、お家の事情ではなく、個人的な理由が増えています。つまり、子どもに家業を継いでもらう必要がないので子どもをもうける必要もない、故に実は結婚する必要もない。しかし、多くの人が結婚している。誰かと一緒に生活したい、愛情を交し合いたい、子どもをもうけその成長が楽しみであるなど、個人的な理由がほとんどですね。もちろん、こうして個人的な理由で結婚してもかまわないですが、それだけでいいのでしょうか。

偉そうなことを言っていますが、「あなたはどうか」と言われると、私は大学卒業の後大学院に進学し、塾講師のアルバイト生活をしながら長く一人暮らしをしました。毎朝布団を上げ下げする。ある朝布団をもち上げた瞬間に「ああ、結婚したい」と思いました。一人暮らしの面倒な家事を誰かにやってほしい。そのぐらいの極めていい加減な結婚理由でした。それが崇って

か、いま妻はフルタイムで働いており、私は食事も作り、掃除もし、洗濯も毎日のようにやっています。こうして、結婚したいと思った理由はきわめていい加減なものでした。しかし、子どもをもうけるかどうか。これは真剣に考えました。子どもは自分と異なるもう一つの尊厳な存在ですから、自分の個人的な身勝手の所産であってはならない、そう思ったからです。もちろん、子どもは授かりものですから、自分たちの意志だけではどうにもならない面はあります。この点はまた次のディスカッションテーマにしたいと思います。

こうして、産業化が進む以前は、結婚・出産の目的や意味は、基本的には家業の存続のためでした。したがって子どもは家業の後継者です。ということは、子どもが生まれた瞬間から、親の中にはその子をどこに向かって育てていけばいいのか、子育ての青写真がきわめて明瞭に描かれていました。その家が農家なら一人前の農夫に育てる。職人の家であれば、一人前の職人に育て上げる。基本的にそこに迷いはありません。そして子ども自身ももの心がついたら自分が将来どうなるかある程度見えていたと思います。“自分探し”は基本的にはありません。もちろん長男か次、三男であるかで事情は違ったと思いますが、その点はここでは取り上げません。そして今と大きく違うのは、ある意味で、子どもの教育の主役は父親だったということです。身の回りの世話やしつけは母親が担当したとしても、仕事を教える、必要な職業道徳を叩き込む、これは多く父親の役割でした。母親は家庭教育の脇役だったと言っていいと思います。ところが現在は家業が衰退し、後継者が要りません。先ほど見ましたように、結婚、出産の目的や意味が個人的な願望や楽しみといったものになってきました。そうすると起こるのが子育ての青写真の曖昧化です。農夫の子は農夫に、職人の子は職人に、武士の子は武士にというような規定路線はもはやありません。皆さんもそうだと思いますが、親の職業と子どもの職業がまったく違う、それが当然の時代になっています。子どもの将来が親には見えません。そして子ども自身にも見えません。見えるのは小、中、高あるいは大学という、皆が越えなければならない横一線のハードルだけです。その先にあるのが“大人”だということだけは子どもにもわかっていますが、どんな仕事をし、どんな生活をしている大人なのかは親にも子どもにもまったく見えない。ここに現代の子育ての難しさがあります。

そして昔と違うもう一つ大きな点は、多くの父親が育児から撤退したことです。いま触れましたが、かつては父親が子育ての主役でした。ところが今は子育てや家事は奥さんに任せっきりです。イクメンという言葉聞くようになりましたが、まだまだ全体的には大したことはやっていないようです。よくテレビドラマでありますね。子どもが学校で悪さをして母親が呼び出され、家に帰ってから仕事で遅く帰ってきた夫にそれを話すと、「子どものことは全部お前に任せてあるだろう。お前が悪いんだ」と言われる。奥さんのほうは「なによ。仕事、仕事って。あなたが悪いのよ」と喧嘩になる。これはある意味でリアルな話ですね。以前は子どもにとって父親は目標であり、仕事の師匠でもありました。早く父親のような一人前の農夫になりたい、職人になりたいと、父親が子どもの将来のロールモデルを提供していました。しかし、いまや家庭で子どもに教えるべき仕事はありません。こうして母親が家事と育児を一身に背負い込む。ここにもまた

現代の子育ての難しさがありますね。

そして昔と違うさらに大きな点として指摘すべきは、親による子どもの私物化という現象です。かつて子どもは家業の重要な担い手であり、大きな生産力でした。経済学の言葉を借りれば、子どもは生産のためのお宝、生産財でした。家族の、あるいはもっと広く親族共同体の共有財産です。親の個人的な所有物ではありません。ですから、時に体罰を伴うような行き過ぎた訓練があったとしても、親の身勝手を押し付けたり、虐待したりできない存在でした。そんなことをすれば共同体は重要な財産を失うことになります。もちろん貧しさなどの諸事情で子どもを育てられないのに産んでしまって、すぐに殺してしまうなどの悲劇は昔から多くあったようです。しかし今は親が子どもをペットのようにかわいがって楽しんでいる。自分の好みを押し付け、その姿を見て楽しんでいる。そういうことも少なくありません。まるで好きなテレビを見て楽しんでいるかのような、大衆消費財のような扱いを子どもが受けている、そういう面があるのではないのでしょうか。本学の卒業生で、ある県の児童相談所の職員として働いている人の話を聞いたことがあります。親から虐待を受けている子どもをその親から隔離する。するとその親は毎日のように連絡したり直接やって来て言うそうです。「子どもを返せ。他人が勝手なことをするな。オレの子どもなんだから、オレが、親が何をしようと親の勝手だろう！」と。まさに子どもを自分の所有物だと思っていますね。児童虐待が起きるその根底には、産む必要のない子どもを親の身勝手に産んで、可愛がり、可愛がることができなくなったら自分の所有物のように虐待したり処分したりする。こんな言葉は使いたくありませんが、子どもの消費財化、このような現実があるように思います。もちろん、子どもに一刻も早く働いてもらわないといけない、そのような大変な家庭もあると思いますが、先に見ましたように、子ども自体は少なくとも学校を卒業するまでは生産力としてはあまり期待されていません。これを裏付けるのが、子どもの働く経験の少なさです。子どもは大学生までは働かなくてもよい、または働かせてはいけないというわけで、生産活動に従事する機会がほとんどありません。家の手伝いすらさせない。子どもは親や他人が生産し用意したものを消費するだけになっています。ここではお示しませんが、裏付けるデータもあります。ここで一言申し上げれば、人間は他者と一緒に働くことによって、何かを生み出す生産活動によって、自分も他人の役に立っている、必要とされているという実感を持てるのだと思います。これこそが社会の一員としての自覚につながると私は考えます。しかし他人が生産したものをひたすら消費するだけでは、そうした実感は持てません。最近よく言われる“居場所”がない子どもが増えているという問題も、家族や仲間集団になんらかのかたちで生産的に貢献する生活の少なさが関係しているように思えてなりません。

創価教育に影響を与えたJ. デューイは働く経験の重要性について、こう語っています。これは20世紀の初めの話です。「今日ここでこうして顔をあわせているおたがいから一代・二代ないしせいぜい三代さかのほれば、家庭が実際に、産業上のすべての典型的な仕事とそのなかで行われ、またそのまわりに群がっている中心であったような時代がみいだされる。(中略) われわれはこのような生活のなかにふくまれている訓練ならびに性格形成の諸要因、すなわち、秩序や勤

勉の習慣、責任の観念、およそ社会においてなにごとかを為し、なにものかを生産する義務の観念などの訓練の諸要因をみのがすことはできない」(J.Dewey, *The School and Society*, Nabu Public Domain Reprints, pp.6-7: J. デューイ『学校と社会』宮下誠一郎訳、岩波文庫、2005年改訂版、21-22頁)と。この重要な教育的要素が産業化によって家庭から奪われてしまったので、彼はシカゴ大学やコロンビア大学ティーチャーズカレッジの付属の小学校などで、木工や金工や裁縫などの体験をたくさんさせました。親からは、うちの子を職人にするつもりはないからやめてくれというクレームもあったようですが、そんなことのために行っているのではないというわけです。またご存知のように、牧口常三郎も「半日学校制度」を提唱し、1日かけて行っている当時の学校教育を創価教育によって効率的に半日で行い、あとの半日は働く経験、様々な職業体験を提唱しました。私は働く経験こそ最大の道徳教育だと考えます。働く過程で身につける職業道徳、これこそが人間の道徳性の基盤になると思います。産業化が進む以前は家庭でこれが機能していました。しかし、いまはこれが難しい。ここにこそ家庭の教育力の低下と言われる現実があると思います。

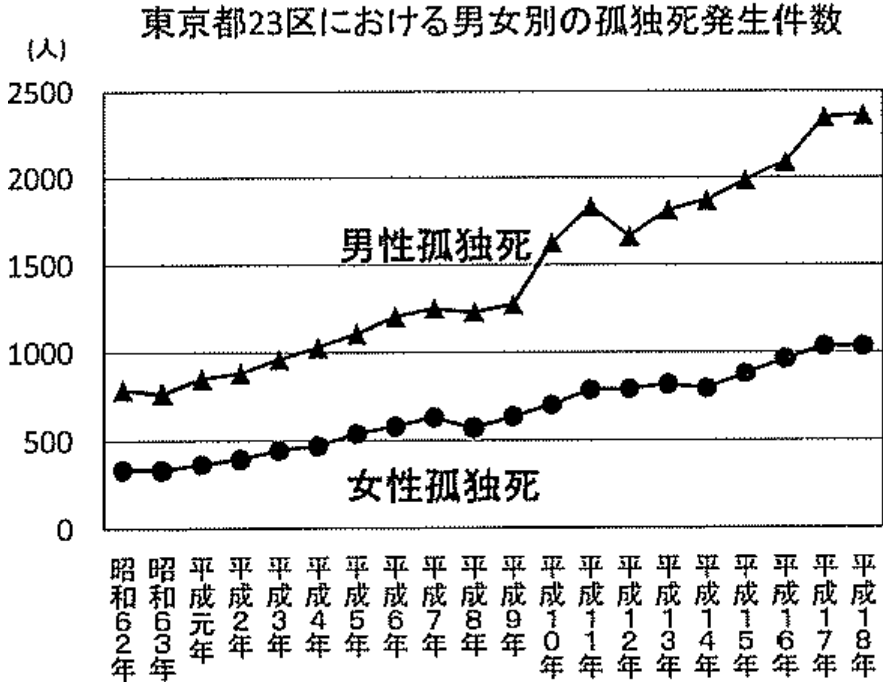
結婚、出産しなくていい時代だからこそ、結婚するのはなぜ、子どもをもうけるのはなぜ。これを一人ひとりがしっかりもたないといけない時代だと思います。ところが、時代の流れになかなか私たちの心がついていかない。今は人生に既定路線はなく、どう生きるか全く自由な時代です。自由ということは、裏を返せば、生きることに迷う時代、生きるのが難しい時代だと言えます。そうした時代に結婚したいからする。いやになったら別れる。子どもがほしいから子どもをもうける。言うことを聞かなくなったら場合によっては虐待する。はたしてそれでいいのでしょうか。自分はまだいいとしても、子どものことを考えれば、そんなことはできないと思うのです。そこで前半の最後のディスカッションとして、結婚・出産しなくていい時代に、私たちは結婚や出産にどのような意味や目的を、どのような新しい意味や目的を与えることができるでしょうか。さらに激変に洗われて溺れかかっている家族を応援するためのグッドアイデアをディスカッションしてください。(受講生ディスカッション)

はい、ありがとうございます。結婚・出産の意味も時代が変われば変わりますので、誰かがこれが正解だと押し付けるのではなく、一人ひとりがそれをしっかり持っていき、それが大切だという趣旨のご意見をいただきました。おっしゃるとおりだと思います。この点は午後の部で引き続き、議論したいと思います。午前の部はこれで終了します。

5. 地域の絆をめぐって

皆様、ゆっくりお食事やキャンパスの散策などを楽しんでいただけましたでしょうか。それでは午後の部を始めたいと思います。午前の部で結婚・出産の意味や目的について考えていただきました。1点補足しますと、これには現実的理由として経済的そして福祉的な観点もあると思います。勤め先で出る家族手当など経済的な面での結婚生活の有利さ、あるいは年金や介護保険などの福祉的な面を含め、生活を守り成り立たせるために、一人で生きていくよりは家族をつくっているほうが安全・安心で、ある意味で有利だと言えます。これも結婚・出産の理由の1つだと

図6 「孤独死の発生件数」東京都監察医務院 HP より (2017.8.)



思います。これについては、この後でまた考えていきたいと思いますので、ひとまずこのくらいにして次のテーマにいきたいと思います。

次の図を見ていただきます（図6）。これは東京都23区の孤独死の発生件数です。少し古く昭和62年から平成18年までのデータです。事故死か他殺か自殺かわからない人の死を異常死と呼び、その異常死のうち「自宅で亡くなった一人暮らしの人」の場合が「孤独死」「孤立死」とされ、東京都監察医務院が検死をしています。まず男性も女性も件数と人数が少しずつ増えています。また年齢別では、年齢が上がると増えています。男性の方が年齢の若いうちから件数が増えています。一人暮らしで仕事をしている人の割合が多いせいでしょうか。また男女ともに60歳代、70歳代はかなり増えています。年齢もこのくらいになってくると単身世帯が多くなっていることが背景としてあると思います。次に、ここでは示していませんが、亡くなってからの発見されるまでの平均日数も、昭和62年の女性は3日ほど、男性は7日ほどでしたが、少しずつ発見されるまでの日数も伸びていて、平成18年では女性でも6日以上、男性だと倍の12日以上です。最後に男女比ですが、約2対1で男性の孤独死が圧倒的に多くなっています。孤独死が単純に悪いとは言いませんけれども、誰かが近くにいれば助かったかもしれない、一人でいたために苦しんだということも大いにあるかと思しますので、やはり大きな問題だと思います。そこで近くの人と少し話し合ってください。年々孤独死が増加しているのはなぜでしょう。男性に多いのはなぜでしょう。（受講生ディスカッション）

はい、ありがとうございます。いろいろな見解を出していただきました。男性は仕事の人間関

係が主で、退職後に地域の人々の輪の中に入りづらいのではないか。女性のほうが近隣の方との行き来も多く、人間関係が強いので件数が少ないのではないか。子どもの数が減って単身世帯が増えたことが件数の多さにつながっている。女性が近隣や地域のことをわかっている、男性が一人で住んでいるところに女性は尋ねて行きにくい、それがより発見を遅らせているのではないか。発見までの日数が長くなっているのは、やはり地域の間関係が薄くなっているからだと思う。皆さん、まさに社会学者でいらっちゃって、私の言うことがなくなりました。おっしゃるとおりだと思います。無理に付け加えるなら、高齢化によってお互いに出歩く頻度が低くなっていることも発見が遅れる一因でしょうか。ともあれ、まとめますと、やはり地域の人々の人間関係が弱くなってきていると言わざるを得ません。次に平成19年度の『国民生活白書』のデータから近所づきあいについて見てみたいと思います。10年前のもので少々古いのですが、内閣府が調査したものです。まず、近隣住民との行き来の程度ですが、「近隣住民とよく行き来がある」、「ある程度行き来がある」という人が大体4割です。「ほとんど行き来がない」、または「それに該当する人がいない」という人も4割。「あまり行き来していない」という人は2割程度です。それから「隣近所で生活面において協力し合っている他人がいますか」という質問です。いないという人が多い。「生活面で協力し合う人」、「日常的に立ち話する人」、「挨拶程度の人」とそれぞれ分けています。「生活面で協力し合う人」は65.7%の人が0人、誰もいないということですね。「日常的に立ち話する人」の項目では3割以上の人が誰もいないと答えています。その次の1～4人くらいとなると「生活面で協力し合う人」が約28%「立ち話」33%、「挨拶程度」25%となっています。概して、挨拶程度ならするけれども生活面での協力とか、日常的な行き来はほとんどないという方が非常に多いということがわかります。また町会、自治会への参加の頻度のデータもあります。「ほぼ毎日」0.6%、「週に2、3日」1%「週に1日程度」約2%「月に1日程度」9%「年に数回程度」が30%。「参加していない」が51.5%です。(平成19年度『国民生活白書』内閣府HPより：2017.7.) 半分以上の人たちが参加していないことから、地域のつながりが弱くなったことがわかると思います。それではここでまたディスカッションをしていただきます。地域の人と人とのつながりはなぜ弱くなったのでしょうか。弱くなった弱くなったとよく聞きますが、それはなぜなのでしょう。後ほどそれを踏まえた上で今後どうすべきかを考えていきたいと思いますので、宜しくお願いします。(受講生ディスカッション)

はい、これもいろいろな答えを出していただきました。マンションに住んでいるこちらの方の実感では、他人と関わりになりたくないという人が増えている。町会、自治会の活動にもあまり参加しない。引越しをしてきても昔のように挨拶に来ない。だから隣にどんな人が来たのかわからないと。確かにそういう人は増えたように思います。法律的にはプライバシーの問題もあって、気軽に他人のことをいろいろ聞けなくなりましたね。また、こちらの方のご意見では、お子さんが小学生のころは保護者同士の交流がもっと盛んだった。部活やPTAでの関わりがたくさんありました。子どもが独立していくと同時に交際範囲が限られてきて、昔ほどのおつき合いはなくなったということですね。さらにこちらの方は、団地にお住まいで、実際に孤独死がまし

た。おかしいなと思っても勝手に鍵を壊せない。ようやく地域の中で家族が見つかって、連絡が取れてから壊してもいいと許可がおきるまで10時間も経っていて、助かるはずの命が助からなかったということがありました。現代社会はこれからどのようにしていくのか心配ですとのこと。本当に痛ましい出来事ですが、現実には起きていることですね。

地域の絆はなぜ弱くなったのでしょうか。大きくまとめますと、やはり基本的な背景として産業化の進行が挙げられます。産業化以前は職業を同じくする人々の協働に基づく生活の共同がありました。機械がなく生産性も低かったので皆で協力しないと仕事すなわち家業を続けていけない。たとえば農業でしたら、今日はAさんの家の田植え、明日はBさんの家という具合に、無償でそして義務的でもある協力体制がありました。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、「結」などがそうですね。同じような結びつきは農業以外でもありました。ですから、地域の中で生まれてほやっとしていると向こうから強烈な人間関係をつくりに来たわけ。その中に入らないと村八分だということになりかねません。ところが産業化によって、近所に住む人々の職業が皆異なるようになりました。昔のように皆が農業やもの作りをするということはなくなりました。そうすると一緒に共同作業するということがなくなり、生活の共同もなくなります。それが都市社会ですね。都市の定義の一つとして、非農業人口の定住地というとらえ方があります。いまや地域は生活の共同のない人々が物理的に接近して住んでいるだけの状態になっています。これは消費生活においてもますます共同、というより協力ですが、これも少なくなりました。夕食の用意をして醤油や味噌が切れたからといって隣に借りに行く人が今いるでしょうか。まずいないと思います。スーパーやコンビニに行きますよね。わが家にテレビがなかった頃、大相撲の千秋楽などは近所の家にテレビを見せてもらいに行っていました。こんなこと今はないですね。コンビニをはじめいろいろなお店や施設ができて、生活が便利になりました。この便利さと引き換えに私たちが失ったものも実はいろいろあるということになります。ともあれ、地域の中で生まれてほやっとしていると誰も人間関係をつくりに来ない。必要がないからです。絆が弱くなったのは必然的なことだったわけ。その中で私たちは暮らしています。

6. 地域ルネサンスへの道

では、このままでいいでしょうか。皆さんは、やっぱり地域のつながりは大切だと思われませんか。ちなみに、先ほど触れた同じ『国民生活白書』には、「家族や地域や職場の人とのつながりは精神的安らぎをもたらす」というデータもあります。これが本当なら、逆に家族や隣近所とのつながりが弱い人は精神的な安らぎを得られにくいということになります。そうであるのに、先に見た国民性調査の資料では、「もっとも大切なもの」の答えで「家族」はトップでしたが、「地域」がどこにも入っていなかったことに注目したいと思います。選択肢に挙げられていないことにも問題はあっても知れませんが、ともあれ地域についての人々の意識は低いといわざるを得ません。しかし、だからこそ、皆さんもおっしゃっていただきましたように、地域の人と人とのつながりは本当に大事だと考えます。いざというとき職場の人が助けに来てくれるかということ

考えても、やはり一番身近な、物理的に近くに住んでいる人たちの中で人間関係の良い輪ができればそれに越したことはないと思います。先年、大震災がありました、人と人との絆が大きく意識され、近くの人々との助け合いの重要性が再認識されました。

また横のつながりに加えて、縦のつながりも弱くなってきたように感じます。生活の共同があったときはその共同性を基盤にして先祖を敬い祭るということがありましたが、ある調査によりますと、「先祖を大切に思うか」という調査に対し「そう思う」と答える人が減ってきています。自分の先祖だけでなく、亡くなった人、過去の人との絆も私は大切だと考えます。先ほど牧口常三郎の話をしました、私たちがこうしてその業績を学ぶことで牧口は創価教育の父として私たちの中に生きてるように思います。これが過去の人との絆・連帯だと思えます。歴史を学ぶ意味の一つはここにあると考えます。このことがまた、今だけよければいいという発想を越えて、未来に生きる人々のことも考えることにつながると考えます。学ぶとは現在を含む過去を学ぶことですね。過去を学び過去を大切に人は未来を大切にすると考えます。それが人間の英知ではないでしょうか。ささやかな先祖供養の行為もそのようなものとして意義づけていくことができると思います。しかし、今このような縦横のつながりが弱くなっている。そこで、「昔はあんなにつながりが強かったのに」と昔を懐かしんでいるだけではどうしようもありません。今はこちらから人間関係を作りに行かなければ、誰も人間関係を作りに来ない、そういう時代になっています。人と人とのつながりが大事だ、地域のつながりが大事だと思う人がアクションを起こさないと何も変わりませんね。そこで、次のディスカッションです。どうすれば地域を活性化できるでしょうか。あなたの地域振興策、地域ルネサンス作戦、実際に取り組んでいることがあればそれも含めて是非意見交換、情報交換をお願いします。(受講生ディスカッション)

それでは皆さんからのご報告です。こちらの方は、地域の皆でボランティア団体を立ち上げて、月に1回日曜日にゴミ拾いや花の水撒きをして、それが19年続いている。参加者は女性が多いが、朝の10時から夕方4時までいろいろ会話も交わしながら楽しく続けている。すこしでも地域の絆をつくることができているのではないかとのことです。すばらしい活動ですね。そうした活動に意識して積極的に取り組まれていることは本当に意味のあることだと思います。次にこちらの方は、小学校の周囲に団地が新しく建って、自身もそこに住んでいる。校舎の裏側の土地が、税金が使えないなどの諸事情で、雑草が生い茂ったままになっていたが、見かねて、許可をもらって個人で雑草を抜き、花を植えてきた。今ではお花だらけになって、とてもきれいだ。手伝ってくれる人はなかなかいないけれども、それがきっかけでいろいろお話しできる人が増え、今も続けているとのこと。これも本当に素晴らしい活動ですね。皆で行うより、個人でコツコツと取り組むことは本当に地域への意識がないとできないことだと思います。続いて、こちらの方は、もう15年も老人会の会長をやっている。連絡網を作り、メンバーのお宅を一軒一軒回って日常的に交流し、集まりやその他いろいろな活動を続けている。合言葉は「人間、死ぬまで生きよう」とのことです。これも本当に地道な価値ある活動ですね。

もう一人手が挙がりました。都営住宅にお住まいで4人のお子さんがいるお母様。地域の子ど

もたちのためにと年配のボランティアの方や自治会長らとともに通学路に立って子どもたちの安全を守る活動を続けている。しかし毎日ではないため、誰も立たない日に一人で立つようにした。最初は挨拶するにも勇気が必要で、道行く人に「金でももらっているのか」と言われたこともある。しかし慣れてくると声かけも大きくなり、子どもたちも顔を覚えてくれるようになった。最近では子どもだけでなく大人にも声をかけており、近所の方とコミュニケーションをとるきっかけにもなっている。13年間続けているとのこと。本当に頭が下がる地道なすごい地域振興活動ですね。どんどん手が挙がりますが、あとお一人だけで恐縮です。こちらの方のお住まいの九州のある市では地域活性化に力を入れていてそれに参加している。市民に呼びかけ有名な女優を主演にしたPR映画を撮ったこともある。最近では健康づくり委員を毎年募集しているので、2年前から参加し、地域の人たちが参加できるラジオ体操やウォーキングを企画して推進している。自分自身も市のいいところを全国に発信しようとSNSを始めたとのこと。これも市の取り組みへの積極的な参加として、大変素晴らしい活動だと思います。

今までの皆さんの活動の様子を聞いていて個人としてまた団体として地域貢献、地域発展の意識をもって意図的に行動していらっしゃる点が本当に素晴らしいと思いました。現役の学生の皆さんに地域振興策を尋ねると、観光客を呼ぶ、イベントを開催するなどのアイデアが出ます。もちろんそれも大事だと思います。イベントの開催に向けて皆で協力することで絆が形成されることもあると思います。しかし、やはり基本は地域の人と人との日常的なつながりをどうつくるかです。それをどのようにすれば築いていけるのか。その点で、皆さんがそれぞれの地域で地道に取り組んでいる活動は、これからの地域ルネサンスにとって大きな推進力になると考えます。

さて、本日冒頭にお話しした「社会」にも2種類あって、自然に形成された人間関係や集団のことをコミュニティといいます。昔の地域共同体がそうですね。これに対して意図的に計画的につくった集団や組織のことをアソシエーションといいます。いまや自然発生的なコミュニティの形成はなかなか難しいですから、意図して計画してアソシエーションを作る。ボランティア団体も老人会も、町会や自治会もその1つです。これまでコミュニティが担ってきた役割を、こうして意識ある人々がアソシエーションを作って担う。これからの地域を考えると、NPOや企業の参加も含め、こうしたやり方しかないように思います。これは子どもの活動にも言えることだと思います。昔、子どもは地域の子ども同士の輪のなかで鍛えられ、さまざまなことを覚えたわけですが、今はそれが難しくなっています。私の子どもの頃は学校から帰ってきたらランドセルを放り投げて近所の子どもたちと大勢で遊んでいましたが、今はそうではありません。また地域の大人が子どもを叱ることも少なくなりました。しかし、それに代わるものとして、子ども会や地域のスポーツ少年団。その中に担当者や監督の大人がいて教育的な役割を果たしています。こうしてこれからは何につけ意識して、意図的につくり上げた集団を介して行っていく。その意味で、町会や自治会の活動に積極的にかかわり、あるいは応援していくことがとても大切だと思います。

7. 創価教育と世界

ここまで「家族」と「地域」について考えてきました。次は「世界」です。家族を単なる家族、地域を単なる地域として終わらせずに世界とどのように結びつけていくかについて考えます。そこで家族と地域をどう世界に開くか、どうオープンにしていくか。これには創価教育の理念が大いに参考になると考えます。グローバル化という言葉をよく聞くようになりました。人、モノ、カネ、情報が国境を越えて地球的な規模で交流する時代になっています。また「人類社会」と言っている一つの社会が、まだその輪郭らしきものが見えてきたという程度かもしれませんが、現実化に向かって大きく動いているように思います。その中で、私たちは家族の一員として、あるいは地域の一員として、家族のためだけに、地域のためだけに生きることができるのでしょうか。もちろん、先ほど触れましたように、家族は何より大切なものだと思います。大昔でしたら、私たちの人生は親族共同体や地域共同体の中でほぼ自足していたでしょうが、いまはまったく事情が異なります。自分の家族さえよければ、自分の地域さえよければいいというわけにはいかなくなりました。それどころか、民族や国家の一員としてのみ生きることも次第に難しくなっています。民族主義は今なお活発ですが、各地で他の民族主義やグローバル化と衝突しています。また国家主義や国民主義は幾多の戦争を引き起こしてきました。現在も自国第一主義といわれる動きがイギリス、フランス、アメリカカなどさまざまな国で起こっています。これはグローバル化が自国にもたらしたデメリットや問題点を訴え是正しようとするもので、反グローバリズムの動きとっていいかと思います。もちろん、自国を大事にするということは当然のことですが、その延長線上に同じ人類の幸福や平和を指向したいものです。ますますグローバル化する世界から、自分の家族や地域や国だけを切り取ってその利益だけを考えるということは困難になっています。やはり家族、地域、そしてその他のさまざまな集団も、もちろん国家も、世界と直接間接にどのようなオープンな関係を築いていくのか、私はその中にこそ最も身近な家族も地域も生き残る道があると考えます。創価教育の理念を手がかりにその点を具体的に考えていきたいと思ひます。

まず本学の宣伝を少しさせていただきます。本学は1971年に開学しました。創価教育の父牧口常三郎の生誕100年の年です。そのとき創立者が掲げたのが「人間教育の最高学府たれ」「新しき大文化建設の揺籃たれ」「人類の平和を守るフォートレス(要塞)たれ」の3つの建学の精神です。また文学部が人間学科1学科として新たにスタートした2007年には文学部に3つの指針を創立者は示しました。この指針は文学部の理念、教育研究の目的・目標となっています。すなわち「生命の尊厳の探究者たれ」「人類を結ぶ世界市民たれ」「人間主義の勝利の指導者たれ」の3つです。これらの文言を見ますと、そこに込められた理念は、単なる家族主義、地域主義、民族主義、国家主義でないことは一目瞭然です。一言で言い換えれば、創立者が常々語っている「人間主義」ということだと思います。横には人類社会、縦には人類史を射程におさめ、「人間教育」「新しき大文化」「人類の平和」「生命の尊厳」「世界市民」「人間主義」などの人類的価値、すなわち人類社会ですべての人が共有できるような価値の創造を目指しています。これらの一つひとつが

具体的にどのような理念なのか、それをここで論ずることはできませんが、文学部の3指針について私見を一言添えますと、「生命の尊厳」、これは一人の人間の絶対的な尊厳、個人のレベルの尊厳ですね。次に「世界市民」、これはその前に「人類を結ぶ」とありますように、世界市民の立脚基盤は人類社会ですから、これは集団・社会の次元の価値ということになると思います。そして「人間主義」。これは生命の尊厳を指向する世界市民の社会で育まれる思考と行動の様式、すなわち文化の次元の価値と言えると思います。こうして個人と社会と文化の次元から、人類的価値の実現と創造を目指す。これが創価教育の理念であると思います。

その点から牧口常三郎の言葉を考えてみたいと思います。「吾人が茲に論議の対象として居るのは、人格的価値ではなくて、人格価値である。」(牧口常三郎『創価教育学体系Ⅱ』聖教文庫、1972年、205頁) また「人生は畢竟価値の追求である。その価値の獲得実現の理想的生活は幸福である。従って幸福生活への指導を目的とする教育の職能は、価値創造能力の豊富なる所謂有価値の人格を養成するにある」。(牧口常三郎『創価教育学体系Ⅱ』聖教文庫、226頁) 牧口は以上のように述べています。まず「人格的価値」ではなく「人格価値」と。これはどういう意味なのでしょう。私の解釈ですが、たとえば経済的価値や政治的価値、あるいは文化的価値といわれる場合がありますが、結論を先に言えば、人間を離れた政治、人間と無関係な経済や文化はあり得ませんから、そうしたものに価値があるのではなく、価値は人間にあるということだと思えます。経済も政治も文化も人間がつくり上げてきたものです。結局、人間自身に価値があると。もちろん動物や植物にも価値はありますが、それらに価値ありと判ずるのは人間です。「人間が根本だ」「人格が最重要だ」との本質を突いた言葉だと思えます。もちろんそれは、他のあらゆるものから人間を切り離して人間一人貴しとする人間中心主義のそれではありません。「人生は畢竟、価値の追求である」というときの価値の追求とは、この人間という価値の追求、人間そのものの価値を高めることであると思えます。こうして人格価値とは人格そのものに価値があるとする視点ですが、それは他者から切り離された孤立した個人ではなく、社会の中で人々との関係を築いて生きていく、その中で生ずる人格価値ということだと思えます。このことは、今引用した箇所が続いて牧口が、社会の中で是非いて欲しい人、いてもいなくてもいい人、いてもらっては困る人を例に挙げ、人格価値といっても、それは社会関係の中で生ずるとする社会学的な視点が示されています。

また本学の創立者はコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジで「世界市民」について講演していますが、それについて次のように語っています。「私は、コロンビア大学での講演で、『世界市民』としての要件を、次のように挙げました。一、生命の相関性を深く認識しゆく『智慧の人』 一、人種や民族や文化の差異を恐れたり、拒否したりするのではなく、尊重し、理解し、成長の糧としゆく『勇気の人』 一、身近に限らず、遠いところで苦しんでいる人々にも同苦し、連帯しゆく『慈悲の人』 そして、こうした普遍的な英知と精神—『世界市民』が具えるべき卓越した資質を育むことが、これからの教育の重要な役割の一つであると提唱しました。」(池田大作、ジム・ガリソン、ラリー・ヒックマン『人間教育への新しき潮流 デューイと創価教育』、第三文明社、2014年、245頁) 本学もスーパーグローバル大学創生支援事業に採択され、この理念に基づいて、世界の人々

のために貢献できる人材の育成に力を入れています。

そこで、このような人類的価値の創造を目指す世界市民と、これまで考えてきた家族と地域のあり方をどう関係づけることができるのか、ここからはその点を考えていきたいと思います。まず、家族ですが、家族の出発点である結婚と出産に私たちはどのような意味を与えることができるでしょうか。すでに皆さんにも考えていただきましたように、結婚するのも出産するのも自由な時代であるがゆえに、かつてのように家業の後継者を産み、そのために結婚するという明確な意味づけが難しくなり、曖昧化しています。その結果、意味が個人的な感覚や好みに変質しているように思います。百歩譲って結婚そのものは意味というより好みでもいいのかもかもしれません。しかし、子どもをもうけることは、申し上げましたように、もう一人の人間の尊厳に関わることです。自分の好みや欲望だけではならないことだと若い頃から思ってきました。なのに、私は結婚だけでなく、子どもももうけました。わが家に後継者は要らないのに、なぜ私が子どもをもうけようと思ったのか。実はそこには創価教育の理念をヒントに考えたことがありました。すなわち、わが家に後継者は必要なくても、人類には後継者が必要である。そうだ、子宝を授かるなら人類の後継者をもうけよう、私はそう思い、妻にも話しました。幸い子宝に恵まれ、男の子を2人授かりました。その子どもたちも今ではすっかり大人になりました。彼らを知っている人からは、ひょっとして、「あれが人類の後継者か」と後ろ指を指されているかもしれません。人類の後継者だと思って育ててもこういうことは十分ありうることです。しかし、だからこそ、確たる方針もなく個人的な好みや感覚で子どもをもうけ育てたとしたら、どんな子どもに育つかまったくわかりません。私は少なくとも意識としては自分の子どもは人類の後継者だと思って育てました。ですから、杉山家のあとを継ぐ必要もなければ、親の志を継ぐ必要もありません。もちろん、人類の後継者を育てるといっても、特別な英才教育などは何もしていません。ただ、子どもは人類の共有財産であって、自分の所有物ではない、その意味でわが子であってわが子ではない、そういうスタンスで接してきたまでです。私はただ、人類に貢献できるような、とはいってもすぐさま世界に飛び出すというようなことではなく、身近な家族や地域の人々を通じて貢献していく、そんな大人になってくれればいいと思い、接してきました。家族や地域を大切にするのは、単なる家族エゴ、地域エゴからではなく、すべての人を大切にするという思いから、最も身近な人と愛情を交わし合って、その愛情を少しでも外へ広げていける、そのような大人に育ててほしいと思ってきました。また自分自身も常にそういう人間でありたいと思っています。したがって、もし人類的な普遍的な価値の創造と実現に偉大な力を発揮するリーダーがいれば、その人との人間関係を軸に人生を生きていってもらいたいと思っています。では、親は何をするのか。親は最低限ご飯を食べさせて、本人が望む教育を責任をもって受けさせることでしょうか。その上で、世界市民として生きていくことをそれとなく言葉と姿で示していくことだと思っています。私は、子どもはたまたま縁あって自分の子どもとして生まれてきた。親は今述べたように育てる責任があるだけだと思っています。もちろんそこには喜びややりがいも感じますね。はたしてそんなことが可能なかという疑問も当然あると思います。そこで、少し難しいかもし

れませんが、最後のディスカッションとして、どうすれば世界市民、地球市民の育成が可能なのか、「わが家の世界市民育成に向けて」を話し合っていたきたいと思います。(受講生ディスカッション)

ありがとうございます。時間の関係で報告はお一人とさせていただきます。こちらの婦人の方は、息子さんが大学時代の交換留学でボリビアに行き、発展途上国の生活を見て大変驚き、今そのさまざまな問題を何とか解決したいと研究の仕事に携わっているとのこと。ご自身は子どもを産むときに、自分が産むけれども自分の子どもではない、この子は授かりものであると誓い、育てさせていただいて社会にお返ししなければいけない子どもであると決めた。というのは決めないと溺愛してしまうからで、お陰で冷静な母でいることができた。ただ、社会にお返しするという思いで育てたが、不登校になったり、反抗期ももちろんあったりした。それを写真に記録して、今は立派になった息子に子どもができたときに見せようと思っているとのことです。大変ありがとうございます。素晴らしいご報告ですね。グローバルというところか外国に行かなければならないと思われがちです。今のご報告はたまたま海外経験のあるお子さんの例でしたが、必ずしも行かなくてもいいと思います。創立者が語る「世界市民」の要件について先ほど引用しましたが、コロンビア大学での講演では、その直前に当たる箇所で、「それは決して、単に何か国語を話せるとか、何か国を旅行したということで、決まるものではない。国外に一回も出たことがなくても、世界の平和と繁栄を願い、貢献している気高き庶民を、私は数多く友人としております」(池田大作「地球市民教育への一考察」創価大学創価教育研究所編『創立の精神を学ぶ(改訂版)』2014年、226頁)と述べられているとおりです。さらに牧口は「吾人が狭隘なる国家主義の一極端に偏すべからざるとともに、汎愛虚妄なる世界主義の他の極端に陥るべからざるは、もってみるべからざるや」(牧口常三郎『人生地理学Ⅰ』聖教文庫、28頁)と述べています。すなわち、自分自身が生きている現実や身近なところに足場をもたないような「世界」は虚妄であるという趣旨ですね。また同じ『人生地理学』には「吾人は数百乃至数千の一郷民たるが上に五千万の一国民たり。しかしてなお、十五億万の一世界民たることを自覚するをうべし」。(牧口常三郎『人生地理学Ⅰ』聖教文庫版、29頁)言葉は難しいですが、要するに世界といっても今自分がいる場所で出会う人々、その人たちを通して人類全体を呼吸し指向すること、そして自分がどの社会の一員であるのかを二重にも三重にも重層的に認識することだと思えます。

牧口に影響を与えたとして先に紹介したデュルケムもこう言っています。「一部の一元論者が何と言おうと、家族、国家、人類という3つの集団にたいする各々の感情は決して矛盾し合うものではない。(中略)家族は国家と異なる仕方で個人を包み、国家とは異なる道徳的要請に応えるものだ。家族と国家の間に二者択一の必要はない。そして、人間は、この三重の作用に、同時に服しないかぎり、道徳的には完成されえないのである。」(E.Durkheim, *L'Education Morale*, P. U.F.1925/1974, pp.62-63; 『道徳教育論Ⅰ』麻生誠・山村健訳、明治図書、1964年、109頁) また「近代意識が要求する祖国は、自己の特殊利益以外に規準を認めず、あらゆる道徳的規準の拘束を無視するところの、嫉妬深く利己的な国家ではない。祖国が道徳的価値たりうるのは、現実実現されて

おらず、またおそらく今後も実現不可能であろうけれども、あくまでわれわれが接近しようと目指している究極理想たる人類社会に対して、国家が最も近い距離にあるからである。このような祖国の概念をいわゆるユートピアの夢物語だと考えてはならない。歴史を見れば、この理想が現実のものとなってきていることがわかるであろう」(E.Durkheim,*L'Education Morale*, pp.68-69; 『道徳教育論 I』麻生誠・山村健訳、115-116頁)と洞察しています。

考えてみれば世界のどこに行っても、そこにあるのは地域社会です。それを大切にしないで世界を大切にすることはできないということだと思います。先ほど、出産について、人類の後継者をもうけるといいましたが、それに関連して、結婚は人類の後継者を共に育て、そこに喜びを感じる、そういう意味づけや生き方も可能だと思うのです。もちろん、人類への貢献は結婚してもしなくても、子どもがいてもいなくてもできることです。ともあれ、身近な家族や地域の人々をとおして人類に貢献する、そういった生活ができれば素晴らしいと思います。人類への貢献などというと、なにかそのために犠牲になるというイメージをもつ人がいるかもしれませんが、社会学の視点から言えば、個人と人類社会全体の間にある家族や地域や職場や国家のために貢献する場合には、過去にたくさんあったように、それらの集団のために個人が自由な生き方ができず、個性や才能を捨てて集団の犠牲になるということはあることだと思います。しかし、人間社会の最も大きな枠組みである人類社会に貢献するという場合には、そのために犠牲になるということは事実上あり得ない。むしろ自分の個性や才能を思う存分発揮して貢献するという様相になると思います。そのように人類全体にオープンにされたとき、デュルケムや牧口がいうように、自分にとって家族と地域も新たな意味と働きを見せるように思います。私は自分のゼミの卒業生の結婚式に呼ばれ、時々スピーチを頼まれるのですが、新郎新婦は大体“イチャイチャ”していますので、ジョークを交えながらこんな話をしています。「24時間イチャイチャするような、そのような人生ではなく、人生の8割から9割は、身近な人を通じて地域や社会に貢献し、さらに世界の平和と人類の幸福に貢献するような人生、そのような夫婦でありたい。自分もそう心がけている。しかし、世界の平和と人類の幸福のためだけに生きるならば、なにも結婚する必要はない。結婚したからには“イチャイチャ”したい。すなわち、イチャイチャー—世界平和、イチャイチャー—人類の幸福、このリズムのなかにこそに真実の充実の人生、すなわち“末永いご多幸”があると確信する(笑)。」まあこんな話です。ここからは真面目に申し上げますが、実は私はそれが家族や地域を世界に開くことだと考えます。世界の平和のために生きる恋人同士、人類の幸福に貢献する夫婦。みなさん、素敵だと思いませんか。私はささやかながら町会の役員として活動していますが、これはわが地域さえよければいいという気持ちではなく、人類の一員だという意識で地域を大切に、家族を大切にしているつもりです。

そして家族ルネサンスについてもう一言加えますと、私は先に触れました家族が元々もっていた生産の機能、これを取りもどすこと、そしてもう1つ、地域との連携、地域の絆による再生にしか家族の未来はないように感じています。デューイは、一緒に何かをつくりあげるといふ共同作業が学校の教室にはないと指摘しています。しかし、これに続けて、運動場では自発的

に社会が形成されているという趣旨のことを言っています。(J.Dewey, *The School and Society*, Nabu Public Domain Reprints, pp.11-12: J. デューイ『学校と社会』宮原誠一訳、2005年、27頁) 学校の場合、生産というよりも遊びですが、子どもにとって遊びは生産だと思います。いろいろ工夫をして何かを自分たちで作りに出そうとしている。皆で何かを生み出す、生産する活動は、いわゆる労働だけでなく、遊びやクラブ活動、そして家の手伝いなどの中にも存在します。そういう経験をわが家でさせてあげられるとどんなにいいかと思います。さきに触れましたように、牧口は半日学校制度の導入を主張しました。これは学習を生活の準備とするのではなく、生活をしながら学習し、学習しながら生活をする。デューイと同じ考え方です。私は広い意味での生産活動の大切さ、何かを生み出し自分と他者に何かを与えることの道徳的な重要性を強調したいと思います。私は大学院生時代に八王子市内の予備校でアルバイトをしていました。ある男子高校生の母親から息子の個人指導を頼まれ、その生徒を自分の家に呼んで一緒に食事をしてから勉強をと思って、ご飯を炊き、ヘラを渡してご飯を盛ってくれるよう頼みました。生徒は茶碗にご飯を盛った経験が一度もなく、うまく盛れずに戸惑っていました。そのような子どもが毎日ご飯を盛ってくれる親の気持ちがわかるのでしょうか。最低限そうした経験をし、大変さを知って、はじめて人の気持ちがわかるようになり、人の立場にたつてものを考えられるようになる。これこそが道徳教育の出発点だと思います。そう思って自分の息子には家事の手伝いをさせていましたが、もっともっとさせるべきだったと思います。道徳教育とは道徳の授業でなにか教訓を与えるというよりも、労働の経験、働く経験、何かを他者と共に作り上げる経験によって、自分が人の役立っている、それゆえに社会の一員として受け入れてもらっている、それ故に他者への感謝の気持ちが生まれる、自分がそこにいていいというこの感覚こそが居場所感だと思います。これこそが社会の一員としての自覚の基礎だと考えます。親を初めとする大人たちが生産したものを、ただ消費するだけでは、そのような社会人の自覚は到底生まれ得ないと考えます。こうした体験を意識的に、わが家と、地域と、そしてとりわけ学校で計画的にさせることが重要と考えます。

最後に家族と地域社会の関係についてです。博報堂生活総合研究所が1998年に出した調査報告書で「連立家族」という言葉が使われています。個人化と平等化が進む中で、家族も個人と個人が少し距離を保った関係で、連立政権のようにいつでも離脱が可能であるような、そんな家族観が現れているというのです。この言葉はNHKが2000年に放送した「世紀を越えて」という特集番組でも「自立した個人の連立家族」として紹介されていました。共働きで経済的な自立を夫婦ともに指向するような動きがますます強まってきていますし、指摘されるような動向は確かにありますね。しかし、私はこの「連立家族」という言葉を「地域の人々との連立家族」という意味で使いたいと思います。もはや単一の家族だけでは家族は生き残れない、そこで連立するという意味です。地域の人々が意識して家族的なつながりをつくりながら、お互いに助け合っていく。しかし一方でプライバシーは尊重する。これからは好むと好まざるとに関わらず、そうした方向に行かざるを得ないのではないかと考えています。「他人のために火を灯せば自分の前も明るくなる」という趣旨の言葉があります。これは日蓮の言葉ですが、高齢化社会では他人のため

に火を灯す心がけがますます重要になっているように感じます。大震災によって形あるものは大きく破壊されました。ボランティアの人々が大量被災地に入ってくださり、石巻市出身の私としても本当に嬉しく思いました。日本では阪神大震災の年がボランティア元年などと言われましたが、思えば経済優先の指向の中でこうした無償の行動を軽んじ、評価してこなかったのが戦後の日本社会であったようにも感じます。かつての「結」のような絆をそのまま回復させることはできませんが、社会の変化をよく認識した上で、一人ひとりが意識的に人と結び合う。無償で励まし合い、支えあう。このことは必ずお金とは違う“有償”の結果となってお互いを豊かにすると確信します。

最後に創価教育の最大の特徴、それは“他者を励ますことを教える教育である”と強調したいと思います。皆さん、学校教育を通じて、あるいは家庭で、このような教育を私たちはこれまで経験することができたでしょうか。意外に少なかったのではないのでしょうか。人間は一人では生きていけない、他者と社会をつくって共に生きていく、これは社会学の最も根底にあるテーマでもあります。考えてみれば、私たちの体は元をたどれば宇宙のチリですし、言葉も精神もすべて他人という外部から相互作用によって得たものです。したがってソトを豊かにすればウチが豊かになる、これが創価教育の知恵だと思うのです。創立者はある講演の中で「自己自身による自己の創造とは、他者と苦楽を共有し、他者の生存の力を強化するということの中でのみある」（池田大作「第二章担う生命哲理の伝灯者に」『広布第二章の指針』1973年105頁）と語っています。「他者の生存の力を強化する」、平たく言い換えると「他者を励ます」ということだと思います。もちろん「がんばれ」と声をかけることだけが励ましではないと思います。黙って相手の話に耳を傾ける、あるいは相手を尊重し、その存在をそのまま受け入れるなど、いろいろな姿があると思います。そのような励まし合いができる家族、そしてそのような家族の一員として地域の人々と励ましあえる社会をつくっていったら素晴らしいと思います。本学の創立者はそのような信念で世界中をまわり一人ひとりを励ましてきました。私たちもこうした意識をもちながら、身近な家族や地域社会、その他の社会の人々との関係を意識して強くし、それを世界に開いていく、このような生き方ができれば素晴らしいと思います。本日は長時間にわたってディスカッションへのご参加とご協力、そしてご清聴大変にありがとうございました。